野田宇太郎 文学散歩

第9巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　9
伊豆箱根文学散歩

昭和53年4月10日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1978
0395-90109-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

伊豆

伊豆の風土　九
伊豆東海岸　三
熱海　双柿舎　海蔵寺にて　網代海岸　木下杢太郎の故家　入日の渚　杢太郎碑　松月院　浄の池にて　按針碑　物見塚の柴舟歌碑　旅の写真師
南伊豆　五四
下田まで　海鼠壁と黒船の海と　村松春水碑にて　下田と写真術　了仙寺　お吉の墓　柿崎玉泉寺　辨天島にて　石廊崎
天城から修善寺へ　二三
湯ヶ野　天城越え　湯ヶ島　浴泉歌　世古の湯　『山桜の歌』と『伊豆の踊子』　修善寺　「修禅寺物語」　漱石の恢復　口伊豆の旅
沼津　一五四
沼津と牧水　幾山河のはて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

箱根山

玉くしげ　一六五
箱根路　一六九
山中新田　箱根峠　箱根の関
湖畔にて　一八一
杉並木と蘆ノ湖と　湖畔の宿　箱根路をわが越えくれば
早川流域　二〇四
塔ノ沢

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

伊豆箱根文学散歩　おぼえがき

伊豆の文学調査を始めたのは昭和二十八年からであった。一応半島の旅を終り最初の伊豆文学散歩として発表したのは昭和三十年十二月出版の英宝社版『湘南伊豆文学散歩』だが、それはわたくしにとって伊豆の序の口に過ぎなかった。何しろその頃は単行本にする以外に適当な発表機関もなかったから、様々な困難がつき纏ったが、再度の調査旅行にかかったのは昭和三十四年からで、それをようやく書き終ったのは三十八年である。従って本巻の伊豆の記録は昭和三十八年現在として纏めているので、例えば昭和四十年十一月に湯ヶ野に建立された川端康成の『伊豆の踊子』文学碑や、四十四年二月に開館された伊東の木下杢太郎記念館（生家裏の旧屋の一部）、また口伊豆から下田に至る天城越えの有料道路による自然環境の変化などは思うところあって含めていない。

箱根路を書くために三島から箱根八里を踏査したのは昭和三十七年夏である。まだ箱根町の旧関所の模造建築などもなかったし、箱根の自然破壊も現在（昭和五十三年二月）ほどではなかった。この箱根にしても伊豆にしても観光企業による変貌はいまだにとどまるところを知らぬ有様である。わたくしは本巻によって辛うじて本来の素朴な風土の姿を記録し得たと、自ら胸を撫で下ろす気持である。

（著者）

伊豆箱根文学散歩

伊

豆

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

伊豆の風土

伊豆は歴史と自然美に恵まれて、全体が一つの公園ともいえるような風土である。地図をひらくと、この半島には四つの火山がある。天城火山、猫越(ねつこ)火山、棚場火山、達磨火山である。火山と云っても火を噴いているわけではない。「火山」と書くよりも「花山」と書いた方がむしろ伊豆らしいと感じられるように豊かな山相である。表面は死火山だが、嘗てこの山々が活動したために変化に富んだ伊豆の風土が形造られたのである。形の残った火口は碧水をたたえた沼となって、澄明な瞳のように暖国の明るい色調豊かな空を映しながらしずもっているのもある。この火山が死んでいない証拠に、伊豆には至るところに温泉が湧いている。そばだつ山がなだれ落ちる懸崖の下は、東西南の三面を真っ青な相模湾と太平洋の海波に囲まれている。そこには古い漁港がいくつも点在しているし、山からは金(きん)が出るし、ちょっと大袈裟に考えると、伊豆は山の幸、海の幸、そして温泉郷と、全く地上の楽園と云いたいところである。だが、この豊かな自然が保護されず、歴史が大切にされず、誤った

一時的な観光事業のために傷つけられて、あたら伊豆のすぐれた美観を打ち毀しつつあるのが昭和三十年代からの実状である。

イヅの名の起原には二つの説がある。一つは湯の出る義で、もう一つは崎々の出た義だとされる。湯河原の万葉歌にあった伊豆は『大日本地名辞書』によると、湯出の方が正しく、出崎の方は『日本書紀』の第十二代天皇で日本武尊の父に当る景行天皇のとき、駿河国伊豆半島を割いて一つの国とした時からの誤伝だろうと誌してある。――いずれにしても「伊豆」の地名は古い。

伊豆はこのように三面を海に取囲まれた面積約一、四三〇平方キロメートルの半島であるというばかりでなく、中央を千四百メートル以上の天城山系や千メートル以上の猫越山系などで断ち切られているので、南北の交通は昔から不便を極め、船舶が伊豆の主な交通機関であった。『万葉集』などにも伊豆手舟というような言葉があって、舟のことが多く描かれているのもそのためである。海の国、船の国、そして漂泊の国が伊豆でもあった。島ではないが島と同様に不便なところでもあったから、伊豆はまた流謫の地ともされた。

これを地理学的に、また考古学的にみると興味深い。伊豆半島で耕作に適しているのは北部の狩野川流域の田方平野だけで、これも他地方の平野に比ぶれば、極く狭く、東部を箱根山塊で区切られているために、西から半島に連なる平野はこの一角だけである。従って先史時代からの西部の文化はこの田方平野だけに終っていて、平野を貫流する狩野川流域には弥生式時代の先住民遺跡などが発見されている。また、この地方は中世以来の日本歴史の縮図とさえいえるところで、流謫された武将や傑

僧や公卿などの史跡も多い。源氏もまたこの田方平野から旗揚げした。

この北伊豆の田方平野は俗に口伊豆とも呼ばれる。口伊豆は往時からの唯一の陸地による伊豆の入口で、あとは東と西の海岸に沿う船便に頼っていた。今日では熱海から伊東までの鉄道につづいて、下田まで東海岸を走る伊豆急行電車も通じているが、この電車の通じないまでは、伊東がまるで伊豆の入口かのようにさえ思われ勝ちであった。その伊東といえども鉄道が敷設されるまでは船路のはての伊豆の漁港であり、温泉も湧く小さな生活物資の集散地にすぎなかった。この熱海から伊東に通ずる入口と、三島から口伊豆に至る昔からの入口と、もう一つは沼津から海岸沿いに船又は陸路を辿る入口と、この三路が現在の伊豆の入口である。

さて、わたくしは伊豆半島の文学を求めて往こうとするのだが、古い伊豆の国の香も残る地方も、近代文学ということになると、その選択はむずかしい。伊豆を故郷とした詩人や作家、この伊豆を愛し、その自然を旅して何らかの足跡を文学史上に印した人々、しかもわたくし自身の魂に響く人であり作品であることが第一条件となれば、いよいよむずかしいことである。

先ずわたくしは三つの入口のうちから、旅の順序として熱海を選ぶことにした。横浜が三浦半島の入口にありながら、三浦半島の自然環境とは頗る趣を異にしているのと同様に、この熱海も、伊豆半島の自然環境とはひどく趣を異にする。自然美を営利のために打ち毀して、人工的に俗化した温泉都市だからである。

湯河原から熱海へと、列車は断崖の上を走り、トンネルを潜り、左下に海がひろがる。相模の海に

は違いないが、もうそのあたりは伊豆の海と云ってもよい。地相的条件からいえば、湯河原は伊豆の入口に当るが、わたくしは先ず熱海を伊豆の入口とした。

伊豆東海岸

熱　海

熱海駅に下車して、駅正面から少し入った街の中のとある旅館の前に、巖谷小波の書いた紅葉の筆塚があり、その横に昭和二十九年以来紅葉の句碑も添えられている。これは『金色夜叉』以来、尾崎紅葉の文名をさんざん観光客引きに利用した熱海が、紅葉に対する罪滅ぼしのために作ったとでもいうようなものである。もちろん大して古いものでもないが、戦後わたくしがはじめてこの石を見た時には、すでに荒れはてて粗末にする位ならむしろ建てぬ方がましだとさえ思ったが、いまはどうやら自然石の筆塚らしく四辺も整えられている。

その前の道からだらだらと海沿いの坂道を下ってゆくと、伊豆の海が眼下にひろがって風光だけはさすがにすばらしい。海岸に出て海に面したホテル街の、道路のまんなかに、一本の古い磯馴松が取

り残されたように葉を茂らせていて、その下に、ひょろりと長い自然石の碑が建っている。『金色夜叉』のお宮の松と、その記念の句碑である。

碑には、「紅葉山人記念金色夜叉之碑」という文字の下に、「宮に似たうしろ姿や春の月　風葉」と刻んである。紅葉の弟子で紅葉歿後『金色夜叉』終篇一巻を書いた小栗風葉の句である。商魂たくましい熱海の写真屋達の思いつきで、そこを『金色夜叉』の名所にでっちあげ、いっさい素人写真は撮らせないことにしたのだが、カメラ流行の現代ではもう商魂の役には立たぬらしい。『金色夜叉』は紅葉の文名を高からしめた作品で、近代文学の中の通俗的な名作として徳冨蘆花の『不如帰』と好一対をなしている。いずれも作者の本質が誤解された程に、あまりにも通俗化したきらいがあった。熱海がそのすぐれた自然の恩恵を大事にして野放図な商魂にブレーキを利かせた静かな町であったら、この『金色夜叉』記念の碑も、もうすこしは人々に大切にされたろうし、情緒的にも引立っただろうが、今日のように享楽の底をついたような淫らがましい町になってしまっては、文学の生きる餘地は更にない。

熱海は温泉町として古い歴史をもち、その風光の美しさと気候の温暖とで昔から絶好の保養地として知られていた。温暖だから植物にもめぐまれ、ことに早咲きの熱海の梅林は昔から有名であった。紅葉もまたその熱海の自然にあこがれて明治二十二年（一八八九）にはじめて訪れたらしい。江見水蔭の文によると、それは一月のことで同じ硯友社同人の石橋思案も一緒だったというが、東京ではまだ冬の真盛りの一月も、熱海では梅の花がほころびる季節である。梅林ばかりでなくその頃の熱海温

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo